

第 37 回歴史探訪の会「天誅組と幕末御所周辺の史跡巡り」

第 37 回歴史探訪の会は 11 月 22 日（水）天候に恵まれ寒さも少し和らぎ絶好の史跡巡り日で 22 名の参加でした。入野先生の熱心な解説で時間をとり予定通りには行きませんでした。個人で機会を見つけて散策していただきたく思います。

案内人郷土史研究家 入野 清
世話人 たがかけ利夫

京都御苑と御所のあらまし

所在地 602-0881 京都市上京区京都御苑 3

面積 御苑 東西 700m 南北 1300m 91 万 d (約 27 万坪)

同 御所 同 249m 同 440m 10・9 万 d (約 3・3 万坪)

平安京遷都当時は、御所は現在地よりも 2 血程西にあった。度重なる火災で里内裏の一つであった土御門東洞院殿を元弘元年（1331）北朝の光厳天皇が始めて使用されたのがはじまりとされる。現存する建物は江戸末期の安政 2 年（1855）で平安様式に倣って再建されたものである。以来天皇が東京に遷られる迄の約 500 年間御所が皇居であった。天皇が東京に住まれるようになると宮家、公家も京都を離れ、公家町といわれた活況のあった御所も荒廃し、寂寥の漂う街の様子を維新後間もなく巡察に来られた明治天皇はひどく嘆かわれた。岩倉具視はこれを耳にして、御所の整備に掛り、現在の姿になった。

現在の管理は、宮内庁（大宮御所、仙洞御所等）環境庁（御苑の国民公園として）総務省（京都迎賓館等）と分れて運営・管理されている。

1・堺町御門 御苑の九門一



堺町御門

この門が歴史に名を残すことになるのは、文久 3 年 8 月 18 日に起きた「京都の政変」である。事の起こりは文久 3 年 5 月 20 日午後 11 時頃、御所の朔平門を出た姉小路公知が猿ヶ辻で何者かによって暗殺されたことから始まる。護衛していた者に賊は追い払われたが公知は深手を負い瀕死の状態ですべて自宅に運び込まれた。現場には、賤が使ったとみられる刀が残されており、その刀身には「奥和泉守忠重作」との記名が入っていた。それは薩摩藩内で作られた物でその持ち主は田中新兵衛（雄平）であることが明らかになった。

しかし、新兵衛は捜査中に自決するという事もありこの事件の真相は曖昧になりがちであったが、朝廷は事の真相の解明を命じ、上洛中の諸藩 18 藩の代表が寺町清浄華院で審議した結果、同月 29 日に薩摩藩の乾御門の警衛の解消、九門内の通行禁止が決定された。これにより薩摩藩の朝廷内の発言力は弱まり、朝廷内の会議は尊王攘夷派の過激公家、それを支える長州派の過激尊攘派が指導権をもった。これを苦々しく見ていた

薩摩藩は朝廷内の薩摩藩最良である中川宮（孝明天皇と親密な間柄）を通じて先の 8 月 13 日に出された孝明天皇の大和行幸神武帝の御参拝、その間御親衛の事を春着するという勅旨は孝明天皇自ら出たものではないことが明らかにされた。それを在藩に知らせる為に同年 8 月 17 日夜半から 18 日早朝にかけて、御所の 9 門は

長州藩に事の一切を知らせることなく京都守護職であった会津藩を中心にこれを補佐する形で薩摩藩、桑名等が各門を厳重に固め不審者は猫一匹たりとも通さないという物々しい警護の下で会議は進められた。(資照)

ここで次の5項目が決定された。

- 1・天皇の大和行幸、御親征の軍義の延期
- 1・尊攘派公卿の官位はく奪及び参内禁止
- 1・国事参政、国事寄人の廃止
- 1・長州藩の堺町御門警衛免除
- 1・公武合体のための参預会議

このことによって、朝廷内の尊攘過激派は一掃され、今度は長州藩が御所から追放され、朝廷内の過激公卿三条実美ら7人(初め11人内4人は京に残る)は「七卿の都落ち」となって、御所を追われ長州に向かった。また、長州藩が追われたことで朝廷に発言力を失い、それを拠り所として立ち上がって「天誅組」の面々にもその進路に大きな影響を与えた。

2・九条邸跡と拾翠亭 同境内内



九条邸跡と拾翠亭

九条家は、平安中期藤原基実(1158~66)が近衛家を興し、その30年後に藤原兼実(1186~96)が九条家を興した。その後平安後期になると近衛家は本家近衛家と分家鷹司家になった。一方九条家は九条家と二条家、一条家に分かれ閑白の職を他の藤原家を抑えてこの五家が継承した。所謂五摂家の誕生となった。中でも近衛家と九条家は京都御苑の北と南で広大な敷地を占めた。今ではその面影を忍ばせるのは九条家の茶室「拾翠亭」だけである。拾翠亭は、今から200年ほど前の江戸後期に建てられたもので前に広がる池は勾玉池(九条池とも)で、当時は他の東側の木立も低く東山の山並みが館から

一望できたという。因みに拾翠亭は緑の草花を拾い集めて館でそれを楽しんだことから起きたといわれている。参観日は3月1日から12月27日間の毎週金・土曜日と葵祭・時代祭・春秋の御所一般公開日である。

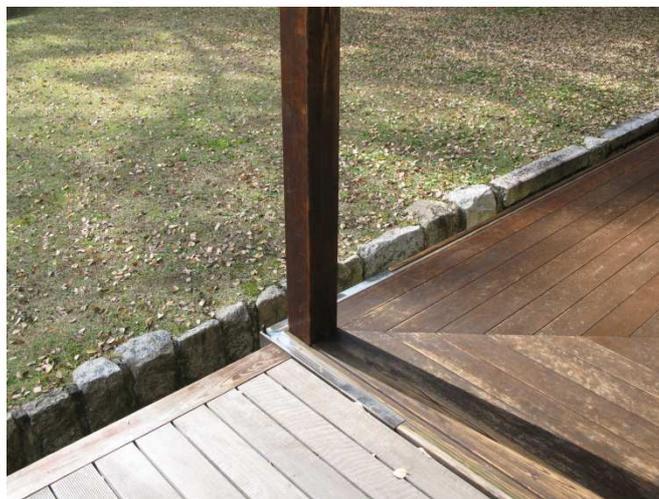
3・開院宮邸跡 同境内

朝廷での皇位継承者は男子を基本としていたので、継承予定者以外の親王は出家して法親王となることが慣例とされていた。ところが承応3年(1654)御光明天皇が22歳で崩御されると天皇系の皇族男子は殆ど出家していて、その後継者が大問題になった。時の御永尾法皇は生後間もない高貴宮(彼の霊元天皇)を踐祚させようとしたが無理なことであるため、四世襲親王家の一つである有櫛川官を継承していた良仁親王は高貴宮が成長するまでの中継ぎとして踐祚して後西天皇となった。こうしたことを補完するために新たに宮家を創出することが論じられてきた。宝永7年8月11日(1710)東山天皇の親王直仁が開院宮の宮号と一千石の所領を下賜され、その屋敷地が京都御苑の南西部に与えられた。旧開院宮邸は、元の位置で近年整備され一般公開されるようになった。江戸時代の遺構を残す唯一の宮家屋敷である。

4・鷹司邸跡 同境内内



閑院宮邸門



広縁雨戸の曲角



閑院宮内室蛙股



蛙股廊下

4・鷹司邸跡 同境内内



鷹司邸跡

鷹司家が歴史にその名を残すのは、幕末に起きた文久 3 年 8 月 18 日の「京の政変」と元治元年 7 月 20 日に起きた「禁門の変」である。時は、嘉永 6 年の黒船到来より外国からの開港と市場の開放要求を回って国内は未曾有の混乱状態にあった。その原因には幕好が断固たる姿勢で事の解決に当たらないからだと幕府に対する批判が高まり、次第にその波は増幅して一つの潮流となり、幕府に代わる新しい枠組みを模索するようになってきた。幕府体制の改善からその体制を解体して新しい流れに対応できる仕組みを作り出さなければならないという集団が出てきた。朝廷内の三条実美らを中心とする尊皇攘夷

の過激派土佐藩の下級武士、庄屋、百姓等又長州藩の下級武士を含めた藩士らは朝廷内の過激派の公卿と共に行動を起こした。

しかし、その行動も西国の雄藩が公武合体を信奉したため、尊王攘夷派の藩が動かず朝廷を動かすどころか朝廷から追放されてしまった。その中心となったのが堺町御門であり、そこに居を構えていた鷹司邸であった。

文久 3 年 8 月 18 日の「京の政変」時には、三条実美らを通じて長州藩は堺町御門の守衛を守ろうとしたが資

料で見るように門の広場で長州藩兵と会津、薩摩藩兵が南北にその間 10m 弱まで接近して刀、槍の鞘を抜いて睨み合いをして対峙した。

朝廷からの勅使が来て堺町御門に長州藩が守衛を解かれた以上そこに踏みとどまることは違勅になることが告げられ、三条実美ら 7 人は長州藩兵に守られ、東山・の妙牡寺に駐屯し、翌日西国長州に向かった。世にいう「七卿の都落ち」である。

元治元年 7 月 20 日の「禁門の変」は、前記の「京の政変」で長州藩が明白な理由もなく堺町御門の守衛を解かれ、長州藩だけが御所の警衛につけないのは歴代の藩主が朝廷に尽ぐしてきた事柄からしても納得出来るものではないとして、「奉勅始末」と「査點書」を作成し、先の文久 3 年 5 月 10 日の攘夷決行に基づく瀬戸内海の外国船の攻撃は一貫して勅命を泰じ、叡慮を重んじて行動したものであり、8 月 18 日の京都政変での支藩藩主がとった行動も何ら罪に値するものではないことを述べた文書を朝廷に奏上しようとした。藩命を受けて井原主計（48 歳）は文久 3 年 11 月 8 日、久坂玄瑞の率いる遊撃隊 11 人を護衛として上京した。同時に政変に際し長州藩の冤罪を弁明してくれた因幡、備前、美作、阿波、津、安芸の六藩に使者を遣わしてその情誼に感謝し、「奉勅始末」に賛同をもとめ、また仙台、福島、相馬、水戸、加賀などの 11 藩にも使者を出して同意を依頼した。しかし、会津藩は再三の嘆願書にも拘らず、井原らの入京を認めなかった。

井原らの申し出は謝罪ではなくて朝議を政変以前に回復しようとする長州藩の意図であると会津藩は朝廷内の公卿に説いた。止む無く、井原らは帰藩し事のいきさつを藩主に復命した。藩内は、慎重派と強硬派とに分かれたが、来島又兵衛らの強硬派が藩の上層を動かし、元治元年 6 月中旬から下旬にかけて長州藩は隊を組織し京の御所を目指して中の関を出発した。しかし、この長州藩の動きは御所を警備している各藩の知る所であり、禁門を挟んで激戦とはなかったが、長州藩の存亡にかかわる大敗北で終わった。

久坂玄瑞（25 歳）は大勢の行方は長州藩に全くの逆風であることが判ると同志の寺島忠三郎（22 歳）と戦乱の中鷹司邸に入り、御所を戦火に巻き込んだことをお詫びし、軍資金の一部を手渡してもはやこれまでと松下村塾で共に学んだ寺島と刺し違えて自決した。

5・横井小南殉節地碑 上京区寺町通り丸太町下ル



横井小南殉節地碑



十津川屋敷跡

横井小南 戊辰 6～明治 2 年）肥後熊本藩士の二男として生まれる。名は時存通称平四郎幕末の儒学者・志士・開明準の思想家。

天保 10 年（1839）藩命で江戸に遊学した折、藤田東湖（水戸藩）・

佐藤一斎（岩村藩）・川路聖謨（幕臣）らと交わり閉塞した現状の打開を語り合った。翌年過失があつて帰国、閉塞を命ぜられる。安政 5 年（18

58）越前藩主松平慶永に招かれて、藩の顧問として藩政改革を指導した。

この時執筆された「国是三論」は開国通商、殖産興業、富国強兵を説いて幕末の開明的政論として知られるようになった。英明的な指導者として名を上げたが明治 2 年 1 月 5 日御所からの帰宅中にキリスト教をひろめる者と

して十津川や石見の郷士らによってここで暗殺された。彼の言葉に「志ある者は命を惜しむ」は有名である。享年 61 歳

6・頼山陽書齋 上京区東三本木丸太町上ル

頼山陽は安策 9 年二芸採 3 年江戸後期の文人、名は囊通称久太郎。別号は三十六峰外史。父は広島薄儀臣頼春水、はじめ叔父頼香坪について学ぶが、寛政 9 年（1797）尾藤二州をたよって東下し、昌平坂学問所にて学ぶ。幼少期からのうつ病が高進し出奔、4 年間の幽閉の後廃嫡される。文化 8 年（1811）の時京都へ出て、丸太町新町に塾を開いた。その間「日本外史」等の執筆をしながら、梁川星巖・大塩中斎・篠崎小竹らと交わった。

「日本外史」は 22 巻の大作で源平の勃興より、徳川幕府の基礎の確立する 3 代將軍家光までを独自の史眼で綴られた武家の歴史書である。

ここ「頼山陽書齋」は、文政 11 年（1828）山紫水明所をたて、「日本政記」を完成し、没するまでの 5 年間を過ごした。

7・新島襄邸跡 上京区寺町通丸太町上ル



新島襄旧邸



新島襄旧邸



御所の石垣に面した道路の東側に、コロニアルスタイルの木造二階建ての洋館が見える。同志社の創立者新島襄（1843 - 1890 天保 14 年～明治 23 年）が自ら設計した住居である。新島は、22 歳の時友人の斡旋で箱館から米国商船で上海へ、船を乗り換えて約一年後、ボストンに入港した。アーモスト大学で学んだあと、明治 7 年（1874）に帰国し山本覚馬の協力を得て同志社英学校を設立した。宣教師テラーの助言で新島自身が設計して建てたのがこの旧邸である。1・2 階ともに 4 重からなり、外観は洋風ながら伝統的な和風の手法が用いられた。別棟の付属屋は武士

であった両親のために士族屋敷の様式でてられた。

8・京都市歴史資料館 上京区松蔭町 142-3

京都市京京都の歴史資料を収集、保存する資料館として造ったもので京都の歴史を知るうえで貴重な民俗資料をはじめ、7 万 5 千点を超える古文書、1 冊書、写真などテーマ毎にわかりやすく展示、紹介している。又京都の年中行事、風俗、風物等をビデオでわかりやすく説明するコーナーもある。

9・清和院門 御苑九門の一つ



清和院門



鴨沂高校

文久3年3月11日孝明天皇は寛永3年（1626）後水尾天皇が賀茂神社上社・下社に御参拝されて以来
 実に237年ぶりに壞夷祈願のため同社に行幸された。この時後に五侯代官所を襲撃することになる土佐庄屋
 吉村虎太郎ら数名がこの行幸を門の前で見守り、次のように母親に手紙を送っている。

「主上賀茂宮へ行幸、実にありがたい御事でございます。私には清和院御門広小路にて拝顔することを鳳草の
 間近です。右「」ことが出来、自然と涙が次から次へと溢れて来て、ただ平伏すだけで詳らかに拝見することは出来
 なくて、後からいろいろ承る所によりますと、玉簾に、天顔を拝する雰囲気でのこの日、御道筋に参集された方々
 は老若男女40万余りということですのでそれぞれ涙を流して喜ばれた。

鳳章の後に臥屑軍馬上にて供奉をつとめられ君臣の区別がはっきりと分けられてよくわかり、幕府吏下民
 に至るまで天朝の有難さを皆そろって申し上げるばかりでした。」と記している。

10・産山寺 同区寺町通り広小路上ル（北ノ辺町）



説明を聞く



枯山水の庭



蘆山寺陵



蘆山寺内紅葉



紫式部が源氏物語を書く

産山寺 天台宗の一派、円浄宗の本山で寺伝によれば、天慶元年（938）、滋恵大師良源（元三大師）が北山に開いた興願金剛院が起り、その後還元3年（1245）に法然上人の弟子住心房覚稔によって船岡山の麓に再建された。名を産山天台講寺と改めて天台教学の拠点とし、天台、律、法相、浄土の四宗兼学寺院となり、洛中の叡山といわれた。応仁の乱に焼け、天正13年現在地に移るが建物は天明大火後の再建である。

門の正面に見えるのは本堂で平安時代の時、ここを住処とし

て「源氏物語」を書いたので新しく本堂前に造られた枯山水の庭園を源氏の庭と呼んでいる。

○史跡御土居跡

源氏の庭を南回りに行くと本堂の東側の墓地に入る。墓の中央に中山家の立派な墓碑がある。明治維新の影の立役者中山忠能の墓であり、その長女慶子は明治天皇の生母である。また明治維新の先駆けといわれる「天誅組」の盟主中山忠光はその実子である。

この墓の東側に豊臣秀吉が洛中洛外の区別に築造した御土居の跡の一部が残されている。当時の御土居は町の発展と共に市街化が進み、取り壊され住宅となってほとんどその形を失い御土居の東限を示す貴重な遺跡である。

11・清浄華院 同区寺町上ル（北ノ辺町）

清浄な華の台を望むという意味を持つ清浄華院は、貞親牛間（859～77）清和天皇の勅願によって禁裏内道場として創建された。後、後白河天皇が法然上人源空を住持とされた所から浄土宗に改宗された。その後転々としたが天正18年（1590）現在の地に移った。本堂には法然上人像や、清和・村上両天皇の尊像と歴代天皇の尊牌を安置している。鐘楼には慶長15年（1610）の銘をもつ梵鐘がある。東側の墓地に姉小路公知や玉松操等歴史上著名な人の墓がある。

歴史上の出来事としては、文久3年5月20日小路公知が御所の朔平門を夜11時ごろ出た時何者かに暗殺された。その犯人を廻って在京40藩の代表がこの広間に集まり審議された。その結果薩摩藩の御所内の通行が禁じられ、同年8月18日「京の政変」の要因となった。

12・梨木神社 同区広小路上ル



梨木神社

幕末から明治維新にかけて活躍した三条異萬、同実美親子の邸宅に明治18年実寓を祀り、続いて実美を合祀した。

実萬（1802～59）は公武対立するなか、内大臣として孝明天皇を守りますが、幕府により一乗寺村に隠棲させられる。実美（1837～91）は尊皇攘夷の急進派の公卿として長州藩の尊皇派と共に朝廷内で奮闘するが、またそれを嫌う一派のために8月18日の「政変」に逢い「七卿の都落ち」となるが九州での雌伏2年ほどの期間を経て明治維新を迎え、新政府では内閣制度の発足まで太政大臣の職を全うした。

境内には、上田秋成や湯川秀樹らの歌碑がある。

13・土御門第跡 御所境内内 土御門第碑



土御門第跡

藤原道長(儒保 3 年二方碁呈阜削苛)は、平安中期の公卿で 摂関政治を象徴する貴族。藤原兼家の 5 男で母は藤原時姫。法成寺・御堂関白ともいわれた。その手法は自分の娘(血縁とは無関係)を天皇家に入れる事で縁者となり、またその子を天皇にすることで天皇の外祖父となり、藤原家、朝廷内での地位を不動な

ものにした。

藤原家全盛期の頂点に上った人である。有名な歌「この世をばわが世とぞ 思ふ望月の かけたることも なしと思へば」はこの邸宅で宴会中に詠われたものといわれている。

14・学習院跡 同境内内

土御門第跡から西北に 150m 程行くと御所に当たりその建春門の東側にこの碑がある。後の学習院大学の基になる一種の学問所があった。歴史上では、文久 2 年(1862) 9 月攘夷を決定した朝廷はこれを実行させるために三条実美、姉小路公知らを土佐藩護衛の許に江戸に遣わし、幕府に攘夷の決断を迫った。幕府は閣内に混乱を来らしたが同年 12 月に入り天皇の攘夷の意思を奉承したとの答書を提出した。これに基づいて朝廷では 12 月 9 日に新しく国事御用掛が設けられ、ここで専ら朝議が開かれた。これに従来の朝廷の重職者の外に新たに三条実美、姉小路公知、三条西季知らの少壮急進公卿らが参加することになった。翌 3 年になると国事参政、国事寄人の二職がおかれ、これには後に「天誅組」の主将となる中山忠光も参加することとなる。また「天誅組」総裁となる土佐庄屋吉村虎太郎と忠光は出会うことになる。

15・猿ヶ辻・朔平門(通番 17) 同境内内。



猿が辻



朔平門

学習院跡から北西に 200m 程行くと猿ヶ辻と朔平門がある。文久 3 年 5 月 20 日、朝議が終わった姉小路公知がその夜半 11 時頃朔平門を出て自宅に帰る途中猿ヶ辻に差し掛かった時、溝に身を潜めていたらしい狼籍音数

名が姉小路を目がけて襲撃してきた、護衛の中条右京がこの賊と戦っている間に、新たな賊が琴小路を襲撃してきた。姉小路はここで落命したとも又家まで運び込まれ、「枕」と叫んでこと切れたともまた緊急措置で数日後に亡くなったともいわれ、諸説があり犯人とも謎の多い事件であった。

16・中山邸跡と祐井 同境内内

明治天皇生誕の碑



明治天皇生誕地跡



明治天皇産湯の井戸（中山邸跡の裕井）

朔平門より東へ200m程行くと御所の名水の一つ諫の井の碑があり、その北側の鉄格子の中に明治天皇生誕の地碑と幼名祐宮が産湯をつかったという井戸がある。（進入禁止）祐宮は嘉永5年（1852）9月22日、中山忠能の長女慶子が孝明天皇の後となり、ここでご生誕された。皇后に御子がいないため祐宮が次期の天皇となるのである。時はこの翌年、浦賀沖にペリー総督が四隻の黒船を率いて来航し、上陸と市場開放を迫るという日本国全体が浮足立ち騒準とした時代であった。この中山家で生まれ、育ち後に明治維新の先駆けの基となる「天課組」の盟主となる中山忠光が8歳の時であった。

18・近衛邸跡 同境内内

朔平門を背にして北へ50m程行くと左に近衛邸跡と右側に桂宮跡に出る。前者は五摂家筆頭の近衛家の屋敷跡であるが、今は建物類は何も残されていない。広大な敷地には、織豊時代の頃近衛家当主近衛前久が島津家保護のもとに建てた豪邸があったというが維新になって近衛家も東京へ移るに当たり、邸宅はバラバラにされて売りに出された。生い茂った樹木とそこを流れる溪谷と屋敷跡に残された桜の大木が当時の栄華を忍ばせる。

19 桂宮邸跡 同境内内

桂宮は、四世襲親王家の一つの宮号。当宮家は、安土桃山時代に創設されたが明治時代に断絶した。石高は3千余りで宮家中でも最大に入る。その沿革は、正親町天皇の第一皇子の誠仁親王の第六皇子智仁親王を祖とする。智仁親王は初め豊臣秀吉の猶子であったが、秀吉に実子が生まれたので豊臣家から離れ、秀吉から邸宅と知行地を与えられ一家をなした。桂離宮は親王の別邸である。個の市が京都八条通りの延長線上になるので八条宮とも呼ばれた。存続、空主を繰り返しながら桂宮家は、後をついた仁孝天皇の皇子節仁親王が亡くなり、文久2年（1862）に姉の淑子内親王が継承したが、明治14年（1881）に亮去されたので桂宮家は断絶した。その後2代目智忠親王の弟広幡忠幸が桂宮の分家広幡家を起こし現在まで続いている。

20・冷泉邸 同区今出川烏丸東入ル（玄武町）

同志社のキャンパスに挟まれて残る冷泉家の住宅は京都御苑の中に公家屋敷の最後に残る貴重な遺構として重要文化財の指定を受けている。

冷泉家は藤原俊成、定家という鎌倉時代の歌人の子孫であり、歌学をもって朝廷につかえた。住宅は天明大火後の寛政2年（1790）の建築で、その座敷では七夕の乞功奠きつこうでんをはじめ代々受け継がれた伝統行事が綿綿筐

と受け継がれ、御文庫には国宝の藤原俊成自筆「古来風鉢抄」や定家筆「古今和歌集」「後撰和歌集」等重要文化財 37 件が知られている。管理は財団法人冷泉家時雨亭文庫によって行われている。

21・相国寺 今出川通烏丸東入ル（相国寺門前町）

上京区で最も広い境内を持つ相国寺は、臨済宗相国寺派の大本山で、万年山相国承天禅寺という。永徳 2 年(1382)足利三代将軍義満により創建された。相国は太政大臣を意味し、故人である夢窓礎石の霊を招請して開山とし、春屋妙菟を二世の住持とした。

応永元年(1394)の失火後、室町幕府が守護大名に課した段銭により再建されて応永 5 年には高さ 360 尺(約 106m)の七十大塔が造立された。応仁の乱では、山門を入った左側にある功德他に架かる天界橋を挟んで細川晴元と松永久秀が対峙して合戦の火ぶたが切られた。その後応仁の乱で衰退するが、豊臣秀吉が寺領を施入して復興する。続いて秀頼、徳川家康に加えて後水尾天皇からも諸堂が寄進されたが天明の大火で主要な建物はほとんどが消滅して法堂と天界橋だけが残すのみとなった。

墓には著名な物が多く、五輪塔の藤原定家、法筐印塔の足利義政、石標の伊藤若沖の 3 墓は時代を代表する墓といわれている。

22・薩摩藩士の墓 同区毘沙門町

薩摩藩戦死者墓

山門を通り北東に 250m 程行き相国寺東通り渡ると北側にこの墓地がる。禁内の変、鳥羽伏見の戦いで犠牲になった薩摩藩士七十二名を埋葬している。これは、蛤御門・薩摩 実行委員会によって大正 4 年乙卯 10 月合葬されてものである。通常は施錠されていて中には入れない。

23・産摩藩邸跡 同区玄武町 同志社大学西門角

薩摩藩邸跡

薩摩藩邸跡西一帯 5805 坪(約 19 千ポ)は明治初期まで藩邸があった所である。今は同志社大学関係の建物で占められているが、維新後会津藩士山本覚馬が所有していたのを「新島裏」にキリスト教の洗礼をうけ全幅の信頼をしていた彼が同志社の用地を探していたのに応えて破格の価格で譲渡された。因みに覚馬の妹山本八重子もキリスト教の洗礼を受け、新島を助け妻となっている。

薩摩藩邸は初め中京区錦東洞院に「錦小路藩邸」がおかれたが手狭になったので文久 2 年(1862)ここに大藩邸を構えた。薩摩藩邸はこのほかに伏見区下板橋通りに「伏見藩邸」があった。この二本松薩摩藩邸が歴史上名を残すのは、慶応 2 年 1 月 22 日に土佐の坂本竜馬の下で薩摩藩西郷吉之助と長州藩桂小五郎とが藩を代表して「薩長同盟」が結ばれたことである。それまでは、薩長はお互いが不信感を持ってことごとく対立するという犬猿の仲で手を結ぶ事など夢想にもできない事であったが、日本国を外国の侵略から守らなければならないという点では二人は共通の認識を持っていた。

それが坂本竜馬、中岡慎太郎らの二人を説得する道であった。

24・乾御門 御苑九門の一つ

京都御苑には 9 つの門があるがこの門の警営を幕末に担っていたのは薩摩藩であった。文久 3 年 5 月 20 日に姉小路公知がこの夜 11 時頃朔平門を出て自宅に帰る途中の猿ヶ辻に差し掛かった時何者かに襲撃され、それがもとで亡くなるという事件が起きた。そこには薩摩藩士田中新兵衛の刀があった。これが証拠となり、薩摩藩は乾御門の警営をとかれ、御苑 9 門の出入りを禁じられた。そのこともあり朝廷内の会議の指導権は長州藩と通じている三条実美ら尊攘過激派に握られた。それが動機となって同年 8 月 18 日「京の政変」が起るのである。

25・禁(始)御門 御苑 9 門の一つ



禁(蛤)御門



「七卿の都落ち」の激戦地での銃弾の跡

9門の一つではあるがこの門は歴史上二つの大きな戦場となった。文久3年8月18日「京の政変」と元治元年7月20日「禁門の変」である。前者では孝明天皇の信頼が厚かった中川宮の思惑（それは摩藩の思惑に通じる）により、京都守護職の会津藩のもと薩摩藩、諸藩がこれを応援する陣形で堺町御門を警営していた長州藩がこの門の役割を解除され、尊王攘夷過激派の三条実美ら11人は、朝廷内から追放されたいわゆる「七卿の都落ち」となった事件である。後者は、一方的に堺町御門の警営を解かれた長州藩は、今まで朝廷を遵奉し、尽力してきた藩としてこの行為は受け入れられるものではないとして「奉勅使末」と「査点書」を作成し、朝廷、幕府・友誼を通じた諸藩に働きかけ、長州藩の地位の回復に努めた。しかし、この長州藩の思惑は時の朝廷側、幕府側には容認されるものではなかった。そうした時間の経過の中で元治元年6月5日京の三条池田屋で長州藩士を中心とした尊王攘夷派の秘密会談が持たれたがこれを壬生の浪士近藤勇らが知る所となり、不意の襲撃を受けた尊王派特に長州藩士は多大な犠牲者を出した。これを知った長州藩士過激派の来島又兵衛らは滞留中の三条実美ら七卿、藩主に実力行使に出ても長州藩の心情を朝廷に訴えるべきであると主張した。高杉晋作らはこの過激行動を今はその時期ではないとして反対を唱えたが藩内の流れは、来島派が主流と成り藩主もこれを支持した。こうして長州藩は同年の6月15日頃から準備され、西国街道の大山崎離宮八幡宮、北の天竜寺、伏見の藩邸にと各隊が続々と集結した。

元治元年7月19日夜半から20日の未明にかけて御所を目指して突き進んだ。最も激戦地となったのがこの禁門である。正面突破を仕掛けたのが来島隊で門の西側から突撃したが、予め準備し待機していた薩摩藩士、会津藩士の前に奮迅空しく来島又兵衛はここで倒れた。このほか久坂玄瑞は鷹司邸で同志寺島忠三郎と刺し違えて自決した。この時「天誅組」に参加し「大和日記」を残した久留米藩の半田門吉も戦死している。

この門には、当時の銃撃戦の弾跡が生々しく残されており、その激しさを忍ばせる。ここを脱出した真木泉守保臣（久留米藩士52歳）ら17人は天王山まで生き延び、立て籠もり幕府側の長州藩士への追撃を食い止めた。その役目が終わると真木和泉はじめ17人はここで自決した。天王山頂上近くに「十七烈士の墓碑」がある。

十七名の遺体は会津藩兵によってその地に埋められ「賊徒ノ塚」と書かれたが、明治維新後その評価も逆転し、招魂碑と共に義士の墓碑として伝えられている。



集合写真



御所紅葉 1



御所紅葉 2



御所紅葉 3



御所紅葉 4